



(先生近影)

牧野先生に御伴して

計畫 宮崎 榊

植物分類學の泰斗理學博士牧野富太郎先生が今回二十年目に歸省された。先生の令名は夥多の植物に名付親として將又世界的の植物學者として、三歳の童でも知らぬ者はない程に有名であります。而も土佐出身の先輩であり乍ら一度もお逢ひしたことなく、ただ憧れの的となつてゐたのでありますが、今回土佐博物會講習會終了後、當局に聘して八月五日から十日迄、魚梁瀨及本山營林署管内に於て御指導を受けることになり、先生にお伴して先生獨特の宛も「立板に水を流す」如き御説明を受けて僅かに數日間でありましたが、非常を得る處がありました。

殊に先生の植物に對する愛着心から、研究の熱心なる真に學者としての態度に感嘆惜く能はざる處があつたのであります。私達は多くの植物を教はつた以上に、植物に心中するこいふ先生の眞劍な研究態度を目のあたり見て我々の研究の足らざるを恥づるに共に或一つの大きな教訓を享けた次第であります。

此の先生の態度であつてこそ此の先生が出られたのでありませう、或る博士は「もう今後おそらく先生の如き方は日本には出て來られないだらう」と語られてゐたさうであります、眞の其の通りであります。

植物に關係のない方でも、先生の研究の爲めには金米も名譽も何も無頓着なる學者としての態度に接するならば、眞に裨益する處大なる事と存じます。

先生は七十三歳といふ高齢にありながら眞に壯者を凌ぐ元氣さであります。御旅行中は勿論御宅にあつても毎夜十一時より早く床につかれたことなく、十二時一時を過ぎるまで勉強されるさうで、かく迄に五十年、六十年も研究され乍ら先生の日本植物誌の完成には十年乃至二十年後でなければならぬと云はれて居ります、此の熱心にして眞劍なる態度に對しても我々は實に慚愧の至りであります。一般人は六十なり七十もなれば恩給でも貰つて隠居生活で樂に暮さうとする時、先生は七十三歳にしてこれからだこの覺悟です。

八月五日旅舎藤田屋を訪ねるに先着の吉永先生の御紹介で玄關で初對面の御挨拶を申し上げたが、如何にも平民的な懐しみのある微笑と氣易さの第一印象を受けさせられました。

局からは吉永先生、藤島課長外三人で打ちこけた旅行は初められました。田野貯木場には馬路の花田署長が出迎へられ、野根、奈半利、安藝營林署員等十四名の大勢となり、トガサハラの材を見、ホソキの區別やオホユウガギクの區別を教はり、車上の人となり途中トサノアホヒを安田にて採取、途上中山村で花田署長がヒロハノコンロンクワのある事を談す、先生は非常に喜ばれ、勇んで降車され採集された。私がつま澤山探らうとするに、先生は止められて

「これはよいのだから後に残して置かう」と植物愛の深いお心で云はれた。その隣りにあつたニガガツシユウを採收されて乗車、馬路に着いたのが午後二時過ぎ、晝食後、花田署長に別れて久木に停車し、ソクヅ、タニジャコウサウ等を探集し、又種々區別を教はり、魚梁瀨署の參考館で標本を見、先生から鑑定を受け、魚梁瀨を立つたのが午後五時過ぎ、一ノ谷の方に入つてケナシウシコロシ、コジキイチゴ、ハナヤクシサウ等いろく採集した。

先頭に居た和田君が谷間に降りてモミヂバセンダイサウの大きなのを澤山探つて來た。先生は大喜びで大きな束を抱へて雀躍した。和田君が「先生御持ちませう」といふに、如何にも無邪氣に、

「これは大切だから人に頼まれん」として大切に御自身で抱へて西ノ川事業所まで持ち歸られました。

午後七時すぎ西ノ川事業所着、大勢で賑やかな夕食を済ます。先生は直ちに腊葉にこりか、られる。腊葉の眞最中に誰や彼やが標本を持つて行つて御尋ねする。喜んで一々可憐に御教へ下さる。大抵の人だ。仕事も済むまで待て。氣持悪く云ふであらうが、先生は却つて喜んで一々區別まで云つて下さる。それで御自分の腊葉の終るのか午後十一時を過ぎ十二時。いふ風で全く恐縮してしまふ。

八月六日、今日は甚吉森から中川事業所を経て石仙さいふ難行路なので早朝出發、途中保護林下方で御指導を受け、漸く一時保護林中央の休場に着く。

折柄、森林主事教習生の實習中だつた堀内技手、宮地主事、柏木囑託が二十名の教習生を引率して出迎へられた。そこで豫定を變更して甚吉森をロストすることになった。それで行程がゆつくりしたので、晝食前、何か講話を。お願ひした處、早速御快諾されて、林冠を漏れる日射を物もせず、三時間餘りを立つたま、有益なお話をされた(其の要領は後に掲げるが筆記不十分で文責は勿論私にあるのである)

保護林を午後三時過ぎ出發、五十名餘りになつた一行は途中種々御指導を受け中川事業所着、教習生一同區別れて石仙事業所に着いたのが午後七時過。

翌七日は早朝雨を冒して附近にてトサチヤルメルサウ、イハユキノシタ等採取調査し、十時半石仙發、途中ズイナの花等を採り馬路晝食、安田濱海岸林にてキンギンナスを採取され局よりの自動車にて歸高。

以上、魚梁瀬方面で珍らしかつたものや名稱の從來と異つたものや、互に似たもので區別の困難なもの等について先生から御教示に預つたものに對しては植物總覽に對照して和田屬が詳細書いて下さる事になつて居ますが、特にフジテンニンサウに云つて魚梁瀬方面の比較的濕氣の多い相當陽光の當る谷側等によく群生してゐたのは其後ヒロハテンニンサウであることもされてゐたのであるが、今度先生が御覽になられミカヘリサウであらうと云はれたが、尙ほ其の幹を御覽になられミカヘリサウは草本であるのに之れは木本であるが、これはトサノミカヘリサウと名づけませうと命名された。其の後御研究の結果いよくトサノミカヘリサウとなつたさうであります。

それから、今まで一般にガクウツギと呼んでゐたものをコンテリギとガクウツギの二様に區別される事の御説明を得た。即

ち莖は稍赤褐色で葉面も紫色に光澤のあるのがコンテリギで一名コバノガクウツギであるこのことであり、又鬱閉した林下によく生じてゐる從來ミヤマシキミと云つてゐたのはハイミヤマシキミであるこのことでもあります。

八月八日、本山に着いたのが午前十時半、晝食后汗見川畔をガソリン機關車にて登り冬ノ瀬下車、途中採集しつ、白髮事業所に午後五時過ぎ着いた。

翌九日白髮頂上へ早朝出發し、途中スヌダケの區別特徴を教はり、時々先生獨特の生物論的的人生觀を拜應し、常にはきつい急坂をも打忘れてしまふ。

今日も随分難行程なので少くとも正午までには頂上に登つてゐなくてはならないのに、保護林の中腹あたりで晝食となる。已むなく急速力を出して頂上を極め北面を下り冬ノ瀬に着いたのが午後五時、それより強雨の中を下つて午後七時過ぎ本山町に着き、今度の旅行の最後の一夜を明かす事になりました。

以上魚梁瀬、本山兩營林署管内で六日間親しく先生に接して植物の種々相についてお教へを受け、非常に裨益する處がありました。而し普通の學者でも敢て其の教はる点は同じであります。特に私達の裨益する處頗る大であつたのは、前にも述べた如く先生の學者としての態度。眞剣な植物研究欲でありました。又何をお尋ねしても、まるで方面違ひでも、又同じことを幾度お尋ねしても、且つ御多忙のまゝをお邪魔しても、お心易く嘲ふこともなく誰にでも、何度でも親切に詳しく詳しく御教へ下さるのは實に先生の人格の然らしむる處であります。

これは脱線ですが、最近面接した某博士の如きは、「……何々に關し、關係でもありませんか」を教へ希ふ。まるで嘲笑するばかりか、却つて努號せられ、當方の尋ねた事に對して叱るやうな態度に出られ私はおぢ込んだ事がある。専門的の學者なるが故に自分は先づ教へを乞はんとして待つてゐたのに、却つて其の素人なるを叱られるやうでは私達はその様な學者に對して尊敬もなければ敬服の念も湧かなかつたのであります。

それから尙敬服させられたのは先生の植物に對する愛護の態度で、先生は一本一草、一葉一莖も決して無意味に損ぜな

いのであります。總て研究の爲めの採集であるこの御考を常に持たれてゐる点があり、さうかがはれることでもあります。又其の珍奇なものは決して絶やさないうやうに保存されること御心掛を常に持たれてゐることでもあります。此のやうなことは眞の愛護者でなければ、なかく、出来難いもので、大抵のものは少し餘分に採つて来て一つ良いものが出来たら、他のものは棄て、かへりみないものであります。先生は決して一葉半葉でも棄てられたのを見たことがないのであります。此の点は近時植物採集をなすに當つて後の種の保存等は毛頭考へず全部皆採してしまふ傾向ある時節柄、特に他山の石とされたいのであります。

—— 魚梁瀨國有林内に於ける講話 ——

まづフヂからお談致します。

フヂは普通東洋に三種ありましてその二種が日本、もう一種が支那にあります。これが元となり園藝的變種となつて數種あるわけでありはす。日本産のフヂはフヂミヤマフヂでありまして、フヂは觀賞用とされ花穂が非常に長くなり且つ多く着いてゐるのであります。ヤマフヂは花穂が餘り長くないのであります。然し人によつては此の穂の長いのを一つの變種として書いて居るものもありますが、長くとも短くとも變種なることはないのであります。

蔓がヤマフヂは左巻、フヂは右巻であります。

尤も宮島のフヂ柵は逆になつて居りますが、之は植えた時に植木屋がネヂで植えた爲めに逆になつたものでありませう。

ヤマフヂの分布區域は非常に廣く、南は九州から北は本州北部まで及んで居ります。そして花が少しく小さく他の一種のフヂより花時が遅れます。

長いフヂをノダフヂ云ふのでありますが、之は大坂郊外の野田に非常に多くあつた爲、かく稱ぶやうになつたもので、野田には現在も空地があつてフヂが残つて居りますが、少くなつたのであります。之は野田のサカサフヂ又はカゲフヂ云つて名高かつたのであります。又奈良公園にはフヂが多いのでありますが、此の類のものであります。關西には多くの種類があります。穂が短くて花が大きい一方のフヂより早く花が咲き、香があります。又一方より葉が少し厚くて多少廣く、葉裏に毛が多いのであります。

園藝變種では、ヤマフヂより出た花の白いフヂをシラフヂ云ひ非常に多いのであります。フヂの方より出たものをシロバナフヂ云ふのであります。東京にては植木屋はヤマフヂをカピタン云ひます。

支那フヂは日本フヂの變種の如く思はれて居たのでありますが、別物であつて、日本のものと一緒にして居るものであります。日本には來て居らず主としてヨーロッパに行つて居るのであります。

日本フヂを紫藤と漢字で書くのは間違であります。紫藤は支那にある藤の一種であります。藤はフヂと書くべきものであります。此の藤は色々の蔓物木質所謂灌木質のカヅラであります。

名稱云ふものは昔の智識に今の知識を加へて研究すべきで温古知新たるべきであります。又この様な研究に當つては實際を充分知つて書物を見る事が必要であります。

ハゼ、今では蠟を採る木をハゼと云ひ、山にある木をヤマハゼと云ひます。日本には昔からあつて古代の名をハニシと云つたものであります。之れがハゼとなつたのであります。ハニシとはハゼの紅葉が綺麗であるから葉錦と言つたやうであるが其のやうな事はない。今のハゼは昔のものでなく古代琉球より來たものらしく、リウキュウハゼ又はトウハゼと云つたものであるが、名の長いと困るからハゼ或はハジミと云ふやうになつて今日まで來たのであります。

ヤマハゼが日本古來のハゼと云つたものであります。ヤマウルシもハゼの一種の如く見たもの、やうであります。

ハゼの漢名は(オウロ)黄蘗を用ゐますが、これは支那の植物で日本には無いのであり又蘗を用ゐてハゼとして居るのも宜しくないであります。

ウラシロ、正月に用ゐるシダ(ウラジロ)に就てお談すれば、ウラシロを正月に用ゐられるのは常緑で何時も青々して長壽を意味し又一名モロムキと云つて葉は何時も向ひ合つて夫婦和合を意味するかも解釋され、又シダとも云つて齒菜ヨハイノ枝目出度ものミこぢつたものもあります。又シダを羊齒とした意味は羊の齒の並んだ如くなつて居るから羊齒と云ひ又支那の爾雅といふ本にメンマ(綿馬)は羊齒なりともあります。

一般に植物名を漢字で書くのはよくないのであります。總て漢字はアテジであるから和名は假名で書くこと、せねばなりません。茜草科をセンサウカ、アカネカミ云ひ、蕁麻科と書いてイラクサ科と讀まねばならん等の不便があります。

アカウは足摺、室戸方面の海岸に自生してゐる亞熱帶植物として名高いもので一般に榕樹と言はれて居りますが、之れは大間違ひであつて四國にもあるのは決して榕樹ではなく、アカウであります。榕樹といふのはカジユマルであつて臺灣等の熱帶地方にあるものであります。

榕は入れるに云ふ意味で樹下に大を入れるに云ふ意味であります。

クロモジは、日本に二種ありて、一つ合の子があり主として中國方面にあります。土佐のものは、概ねケクロモジであります。油を採つて輸出するのでありますが、之れが精製されて又輸入されます。Thunbergが最初粗根で採つたもので *Lindera umbellata* といふ學名がついて居ります。

クズは随分大きいきものがあつて直径四寸位のものもあります。クズからは澱粉を採り葛根カッパタウミ云つて食用に供し又クズの蔓から採つて織つたものを葛布カッパ云ひ着物ミなし、葉は牛馬の飼料ミなります。又秋の七草の一つでありウラハミも云ひウラミにかけて歌を讀んだ例があります。

葛カヅラ、クズは前はカヅラミ言つてゐたものであるが大和吉野にクズミいふ所があつて其處の人をクスヒトミいふたのでありますが、其の人達は生活のためにクズの粉を作つて人里に賣りに來たため、此の名が起つたものであります。

コシアブラ、ゴンゼツの汁を採つて塗物をした如くで、之を金塗コシチミかきしものが、ゴンゼツミ云はれ、又精製するために油をコシタものであるからコシアブラミいはれる。

ツバキは春、花が咲くから椿ミせし如き又ヒヒラギは濃緑の葉に雪が降つて風情があるから終ミせし如く、これ日本で作つた所謂國字であります。

チャンチン、タマツバキ、テンツツキ、クモヤブリ等の名稱があり芽を食用に供しますが、臭いから香椿カッパが支那音でヒヤンチンが訛つてチャンチンミ云つたものであります。チャンチンは約二百年前、隠元和尚が歸國して宇治に寺を造つた時に初めて

植えられたものであります。

オンツツジは、メンツツジより葉大形、花赤で葉の表面に褐色の細毛がありますが、ミツバツツジは花は紫、裏面に毛のあるのは同様であります。表面に毛がなく又オンツツジは一名オンツツジミ云はれ、メンツツジはフヂツツジミ云ふのであります。

ホルトノキの名は當つて居らず中止したのであります。ツグノキミ呼ぶ方がよいのであります。

オリブ油をホルトガル油ミ云つたものであります。其の木の渡來しない前にツグノキをオリブ油を採る木、即ちオリブの木ミ思つて呼んだものであります。今日この過つた名で別のものを呼んで居るのであります。それでオリブの木をホルトノキミ呼ぶ方がよい。現在のホルトノキはツグノキミする方がよいのであります。

次に植物分類學を研究される方は参考書として是非次の書籍を座右にせられんことをお奨め致します。

□本草綱目、古典全集として出て居り四冊で二圓といふ安價であります。

□ *Flora of Japan* シイボルトの著されたもので非常に貴重な書物で現在千圓位するものであるが、左記の所で縮刷復本し、一部六圓で頒布して居ります。

東京市本郷區森川町（東大門前）井上書店内植物文献刊行會

□有用植物目錄シイボルト (*Siebold-Synopsis Plantarum Oeconomiarum*)

□ツンベルグの圖説 (*Thunberg-Flora Japonica*)

刷込の先生の温容は、出發前に撮影を御願ひし、御氣易く御ゆるしを得たのであつたが、バックや光線の關係で出来はよくないけれど、私は書齋に掲げ、朝夕偉大なる先生の人格に接して研究心のゆるまざるやう緊張の態度を養はれてゐる。

一八月二十八日、先生を棧橋に御見送りして稿す